

2014

# 写真を用いた新たな空間表現 ー日常の再発見ー

A New Representation of Photographs: "Rediscovering Daily Life"

AD 17 佐藤 望  
指導教員 西野 隆司

## 1.研究目的

写真とはフィルムに写し撮られた一瞬の時間、空間を紙などの平面媒体へ視覚的に識別可能な画像として記録する方法である。撮影された風景は3次元から2次元に置き換わる特性を持つため、撮られた瞬間に撮影者が見ていた風景を、他者が全く同じく見ることは不可能といえる。

そこで、写真に3次元的要素を補うことが、新たな空間と時間の表現手法になると思い研究題材として取り上げることにした。

## 2.調査と分析

平面を立体的に見せる手法として、幾つかの方法があった。

「ステレオアート」 人間が物を見て認識する時、脳内で立体的な映像に完成させて見ている。その脳の仕組みによって起こる錯視を利用し、平面を立体的に見せる手法。

「被写界深度調整」 写真の撮影技法の一つでピントの合わせ方を調整し立体空間を表現するもの。

「空気遠近法」 浮世絵や西洋絵画の一部にも取り入れられていた画法のひとつ。遠くにあるものほど、色彩を淡くし、青みがかかったように描く方法である。この手法は事物と事物の間には空気が存在し、それを表現することで平面である紙面やキャンバスに距離感や遠近感を持たせるものである。

制作物では「空気遠近法」を応用し、その空気の間にある距離感を効果的に表現したいと考えた。

## 3.コンセプトの立案

「写真で空気感を表す」

事物と事物の間には空気が存在するならば、その空気のある空間を3次元の空間軸の要素だと考え、実際に被写体同士の間には空間を創り出してみる。そうすることで、被写体の前後関係が明らかになり、当人以外の他者が、当人の見ていたような3次元のその瞬間を疑似体験出来ると考えるに至った。

## 4.デザイン展開

モチーフとして広告写真など意図がある写真よりも、皆が見ているような生活の一片、「日常」を選んだ。なぜならば意図的に立体視を目的とした材

料を使わず、最も普遍的であり、平凡だからこそ皆に共通した認識を持てる映像としてリアリティを表現できると考えたからである。

素材として使用する写真は、より「日常」の臨場感を出すために、性別や、職業などの異なる人たちに、使い捨てカメラを渡し撮影してもらった。

素材写真の中から被写体を選び、それらを切り出して透明フィルムに印刷する。それを何枚も重ねることで、被写体同士の間にある空間を表現する技法を考えた。その際、フィルムとフィルムの間には隙間を作る。その隙間こそが、今回の研究で最も表現したかった「事物と事物の間に存在する空気」そのものである。

フィルムが何枚も重なり見えにくくなったので、背面に光源となるライトボックスと組み合わせた。

## 5.完成図



## 6.結論

制作物は全部で9個制作した。その全てが形態は同一ながらも、その中には個々の内意を持っている。それを表現する為に、それぞれの枠に別々の色を配色した。

写真から立体的に空間を表現することが出来たと思う。なおかつ撮影協力者達には、日常を切り取ることや当前の風景を意識し再確認することの難しさを感じてもらえた。それが追求したかった内容だったので、ある種通過点として踏まえた上で今回の結果が導き出されたように思う。

## 7.参考文献

慶応義塾大学佐藤雅彦研究所・中村至男, 2003, 『任意の点P』美術出版社。  
東京国立博物館, 2007, (<http://www.tnm.jp/jp/>)2006.10